

一瀬 大智

ichinose daichi

1995年奈良県生まれ。大阪成蹊大学卒業後、各地で作品を発表。人の痕跡が残るモノへの愛着や、自然との関係性に関心をもち活動。モノに残る空白を、人物や人工物があまり入り込まない「風景」に置き換えて描く。軽い筆致で表現されたそれらは、目にした者に安らぎや温かみを与え、時に懐かしさを感じさせてくれる。

今井 裕之

imai hiroyuki

1964年京都市に生まれる。陶芸家今井政之の次男。東京藝大で鍛金を学び、山梨県立宝石美術専門学校につとめ、2004年に退職し、以後京都で活躍してきた。丸みを帯びてぼんやりとした生体表現を基調に、ユーモアと機知のある金石造形を展開してきた。本年8月には北海道立オホーツク流水科学センターでの金石造形展に参画した。

岩井 晴香

iwai haruka

1986年滋賀県生。学生の頃から創画会での入選、受賞を重ね、2012年「京都日本画新展」優秀賞。静かな森や木立は無窮の時を孕み、沈思する鳥は飛び立つ動きを秘めるように、彼女の描く自然は、継続する時間の表現を追求する。岩絵具による壮大であり心象的でもある画面は、日本画の新たな展開を期待させる。現在、創画会准会員。

海野 厚敬

unno atsutaka

1977年長野県生。油絵具だけでなく様々な素材を合わせた堅牢な地肌の上にスクラッチの線を混えて描かれる世界は、雲や風や水、時には動物を思わせて判然としないが、見る者の心を惹きつける強さを持っている。その表現は上野の森美術館大賞展優秀賞、京展賞他高い評価を受け、近年は日本画とも競演。現在、新制作協会会員。

占部 史人

urabe fumito

1984年愛知県西尾市に浄土真宗寺院の子息として生まれる。愛知県立芸術大学院博士課程後期を修了。現在は静岡大学常勤講師として学生を指導しつつ制作活動を展開している。作品は、自ら拾い集めた素材を用いて、ドローイングと立体によるインスタレーションを発表している。その創作の原点には仏教思想の「空」があるという。

奥中 章人

okunaka akihito

1981年京都市生まれ。2004年静岡大学教育学部美術教育専修卒業。石や金属などを使う従来の彫刻に対して、ワイヤーや透明フィルムなどの柔らかい素材による作品をソフト・スカulptureと呼ぶが、奥中はそれを巨大化させることで、内と外の間を見せるものに体験させる。

梶川 俊一郎

kajikawa syunichiro

1970年愛知県碧南市に伝統工芸・鬼師の家に生まれる。名古屋芸術大学美術学部彫刻科を卒業し、家業の鬼瓦の制作に従事しつつ公募展やグループ展に意欲的な作品を発表している。作品は、鬼瓦の制作で培った繊細な技法を活用し、現代的な感覚による量感あふれるもので、慈しみを根拠とした人間愛を表現している。



一瀬大智〈この砂に帰る〉



占部史人〈ソローの小屋〉



永原トミヒロ〈landscape22-01〉



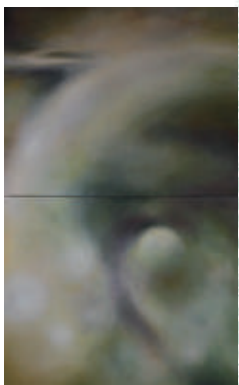
柴田知佳子〈Be-III〉



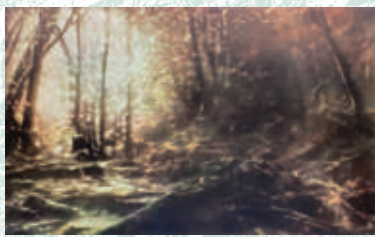
奥中章人〈INTER-WORLD/SPHERE: The three bodies 2021〉写真：白木世志
提供：北九州未来創造芸術祭 ART for SDGs



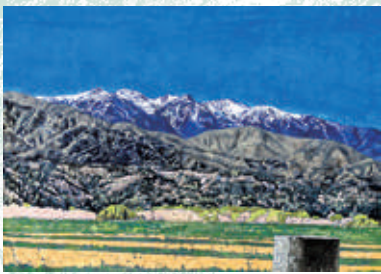
西久松綾〈信濃国河床図〉



中谷ゆうこ〈くうきのてざわり〉



野嶋 葎 (the Reconstruction - Ameagari)



野原都久馬〈絨織たる〉



梶川俊一郎〈林檎 夢想〉

柴田 知佳子

shibata chikako

1968年大阪市生まれ。1994年神戸大学大学院美術教育研究科修了。柴田は基本的に抽象表現主義の作風でありながら、風景の一部を思わせたり、それに由来する心象を盛り込むなどして広がりのある力強い画面作りになっている。近年は横の広がりだけでなく縦の広がりも画面に取り込んでいる。

中島 麦

nakajima mugi

1978年長野県生まれ、大阪育ち。2002年京都市立芸術大学油画専攻卒業。カリリストの中島の作品は、鮮やかな絵具を垂れ流す限りではアクションペインティングともいえるが、色彩相互の関係に着目すればミニマルアートに近いものがある。近年はさらにそれを推し進め、インスタレーションに挑戦している。

中谷 ゆうこ

nakaya yuko

名古屋生まれ。名城大学薬学部卒業。VOCA展（2005年）、ポジョン2016（名古屋市美術館）をはじめ内外の個人グループ展で活動。具象抽象の概念を問わず輪郭線を溶かすように描くことで、空気や光の重さや手触りを無自覚に描き出し、無限の空間を創り出す。

川嶋 渉

kawashima wataru

1966年日本画家川島睦郎の長男として京都市に生まれる。京都精華大学で日本画を学び、1990年改組第22回日展に初入選。何げない日常に潜む、それとなく動くものをじっと見つめて、温かみと新鮮さを感じさせる作風を展開してきた。2019年京都市立芸術大学の教授となり、2020年に日展の会員となった。

坂井 淑恵

sakai yoshie

1965年千葉県生まれ、和歌山育ち。京都市立芸術大学大学院修了、和歌山在住。水と人がモチーフの、のほほん、のんびり、ほんわか、の癒し系？ ゆったりと、広々とした空間のとりかた。人はそれを「間」とか「余白」とか呼ぶが、まさしく「空と間」が描かれているのだろう。イノセンス（無垢）といった言葉でも形容されるが……。



海野厚敬〈ロア〉



林 萌子 (WORK - No.37)
撮影：城戸保



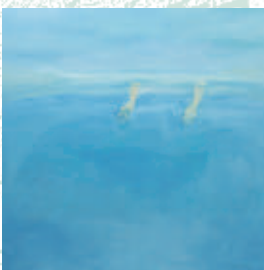
川嶋渉〈銀波紋〉



山田純嗣 (22-15) 菊慈堂



宮田彩加 (Knots Flower and Birds - Tulip)



坂井淑恵 (flutter)
撮影：高嶋清俊
写真提供：GALLERY ZERO



今井裕之〈菊節沢郷愁〉



岩井晴香〈遠い日〉

野原 都久馬

nohara tokuma

1988年熊本市に生まれる。熊本で日本画を学び、2010年日展日本画に初入選。2017年より京都市に居住。2019年の日展で特選を受賞した《群像》は、大阪駅東側の歩道を歩く人達を中心にしたものであるが、その作風からは膠質水性の日本画という素材を生かしたリズム感を感じられ、油彩でも写真でも表現できないものが見られた。

蜂谷 充志

hachiya mitsushi

1963年、長野県飯田市生まれ。「もの」と「記憶」の狭間で、インスタレーションやアートプロジェクトによる作品を手掛け、美術を取り巻く制度に束縛されない一過性の表現手法に敏感に向き合う。また、教育活動も自身の芸術活動と位置づけている。現在、常葉大学造形学部教授、2003年、文化庁新進芸術家研修員。

林 繭子

hayashi mayuko

1969年三重県桑名市に生まれる。愛知県立芸術大学大学院美術研究科を修了。個展やグループ展、美術館などの企画展に参加し、名古屋を拠点に創作活動を展開している。作品は、色彩を軸とする抽象的な表現によるもので、そこには作為的な要素はなく、極めて自然な心の動きを反映したものとなっている。

宮田 彩加

miyata sayaka

京都生まれ。京都造形芸術大学大学院修了。コンピュータ制御のマシン刺繍を基本技法として、織られた糸でしか表し得ないイメージを探求する。糸は図像を構成する媒体でありつつ、時として実体としてその存在を露わにする。故意に仕組まれた制御エラーによる不穏な揺らぎも、生命活動に本質的な不規則性を思い知らされるようでもある。

山田 純嗣

yamada junji

1974年長野県飯田市生まれ。愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻を修了。版画の技法で平面作品を手掛けるが、モチーフを一度立体化して配置し、これを写真に納め再び平面にして版画作品として仕上げていく。近年は著名作品等を立体化する引用の手法で平面表現の絵画性を探求する。

美術と風土

本展は、近畿・東海・そして伊那谷などで活動してきた美術館の学芸員や画廊主などで構成された実行委員会によって、まずは同地で活躍する造形作家20名を選び、その作家たちに実際に伊那谷を訪れてもらい、そこからインスピレーションが得られた作品や、作家自身が選んだ作品を構成して展覧会にしたものです。地域と作家という点では、例えば越後妻有や瀬戸内などでの美術展もありますが、その展覧会を伊那谷の辰野・飯田を初め愛知碧南・京都・大阪豊中などでも展示して、作家と鑑賞者そしてそれらの仲介をつとめた者たちがお互いに交流を深め、新たなるものを生み出す一つの気風を作り出したいと願って行おうとするものです。出品作家は、従来のジャンルで分けるとすれば、日本画家が4名、洋画家が7名、彫刻家が1名、版画家が2名、工芸家が2名、現代美術を含むインスタレーション作家が4名となります。